



# 退魔師ミカ

## -末路凌辱無惨姦-

雑魚敵ハイエナ姦

無限貫通姦

上下串刺しサンドイッチFUCK

オナホ扱い

人質〇見せしめ姦

最強退魔師様名ミカが妖魔の罠にはまり  
徹底凌〇の果てに末路を迎える  
救いなしの無惨END!  
地獄のフルボッコ凌辱CG集

暗い波止場、打ち捨てられた工場跡地の一角、  
今はもう使われなくなったゴミ処理場の跡地、  
もはや人の踏み入らなくなったその奥で、  
戦闘の音が響き渡る。  
打撃音、そして肉の焼け焦げる臭気。  
「もう逃さないわよ！」

豊満な体の美女が指先で印を結び、呪文を唱える。



東京でも最強と目される退魔師

榛名ミカの姿がそこにあった。

グラビアアイドルもかくやというほどの豊満な体を  
退魔レオタードに包み、Gジャンをミニスカートに羽織った  
姿は妖魔の恐れと情欲の対象だ。

女退魔師——榛名ミカの持つ宝具に  
霊力が込められ、そして。

「くらえ！  
雷撃！」

「グギヤオオオオオオオオオッ！」

迸る激しい雷撃とともに、  
身を焼かれた妖魔の絶叫が響き渡る。



「ふん、あっけないもんね  
この私を呼び出した割には」の程度の雑魚妖魔しか  
いないのかしら」

肉の焦げる臭いが漂う中、不敵に笑うミカ。  
その先では、先ほどまでいた妖魔が黒焦げになって  
炭と化していた。

親友であり、退魔師の後輩である主をさらわれたのは、  
数時間前のこと。

ミカのもとに、返してほしければ廃ミカ処理場がある  
波止場まで来いとメッセージが残されていたのだが。

「はいおら、ミカはこれでお終いみたいね……  
それ「しても、お……や」連れて行かれたのっ」

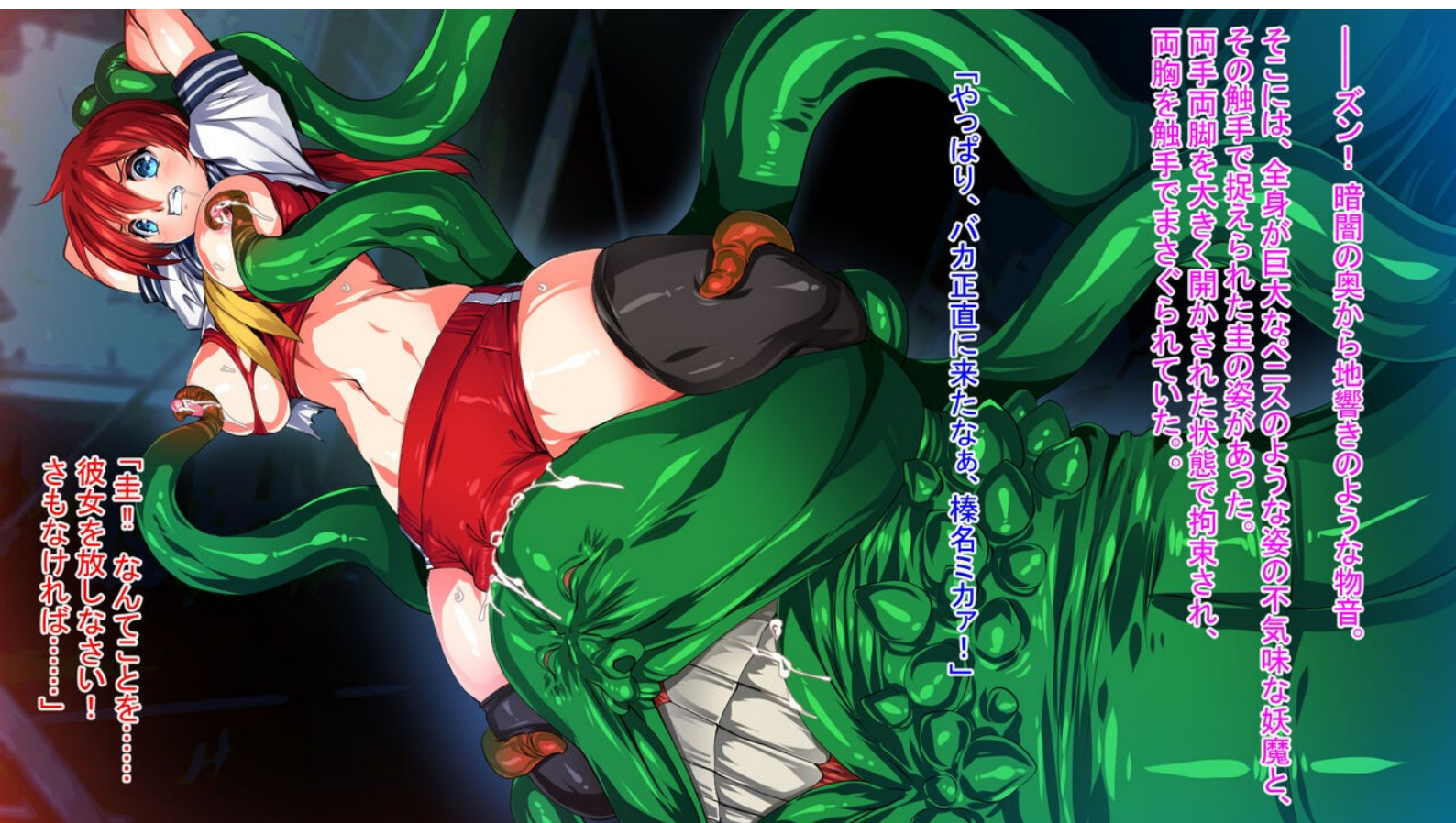


——ズン！ 暗間の奥から地響きのような物音。

そこには、全身が巨大なペニスのような姿の不気味な妖魔と、その触手で捉えられた圭の姿があった。両手両脚を大きく開かされた状態で拘束され、両胸を触手でまさぐられていた。

「やっぱり、バカ正直に来たなあ、様名ミカア！」

「圭!! なんて」「とさ……  
彼女を放しなさい!!  
さもなければ……」



「どうするってんだい？」「この状況でさあ。  
お前はオシに命令できる立場じゃねえたるお？」

ミカはぐっと言葉を飲み込んだ。  
妖魔の凶器は圭の股間にあてがわれている。  
自分が何か行動を起せば、容赦なく圭を貫くだろう。  
あのサイズ差だ、圭が無事で済むわけがない

「ミカ！ 私のごとは構わないで！  
妖魔の言っことなんか聞いちゃ……あぐらぐらぐら……」

「へえ？ お前の可愛い後輩は  
「言ってるけどよお、どうするん？」

妖魔は小馬鹿にした口調で  
ペニス状の頭部をグリグリと押し付けた。



「ふーしー、そんなじゃあ」の女の言う通り「  
してやろうかー」

妖魔は狂喜に満ちた声で叫ぶ。

「な、何をするつもりっ？」

「何きいて、」ムジキをバンバン打ち込んでやるの

決まってるんだらあ、いっいねえ、震えちやうつ……

そんな女をぶっ壊すのはやめられねえよなー」

「ひゅんひゅん」

覚悟を決めたはずのまたったが、あまりにも巨大な  
肉棒の存在に、恐怖の悲鳴を上げ、小刻みに震えだす。

「や、やめてっー！ 解ったわ、  
私は抵抗しないから……  
手を助けて!!!」



「んんん？」「女の子のために体張るってのかなぁ？」

妖魔のバカにしきった言葉に、ミカは鋭い視線で睨みつけながら応える。雑魚妖魔共を押し分け、闇の中から数十本の触手が伸びてきたのだ。それまでの雑魚妖魔たちとは明らかに違う妖気。その威圧感にミカは身構える。

「当たり前でしょ！ 仲間を見殺しにするわけがない……  
お前たち妖魔と違ってね！」

(真打ち登場ってわけね……  
いいわかつつらつらじゃら！)

「おっおっおっ……んんんんん、んんんんん、んんんんん、んんんんん……」



「おらおらおらおらあああああああああああああああああー！」

妖魔は無数の触手を振り回し、ミカに叩きつけた。  
四方八方から鞭のように降り注ぐ触手の攻撃を、  
ミカはまともに受けることとなる。

「うぐうー ああああうーく、「んな、「どでっー  
あ、あぎいっー！ うぐあああああああうー！」

「まだまだくたばんじゃねえぞあー！  
ひひひひひ、退魔師をホメるほど楽しんでっ！ はねえなあー！」



ふいに嵐のような攻撃がやんだ。  
足元はおぼつかないが、まだミカは立っていた。  
その瞳は戦意を失っていない。

「くっくっ……ふうしたの、もう終わり？  
それなら、圭を解放して！」

「はあ？ バカじゃねえの  
お前」まだ見て貰いてえもんがあるからな」

「その前に壊しちゃまうのもつまんねえからな」

「(あ、アムラシもりなの、)の妖魔……」

警視庁の捜査官の目撃——



ミカはぐっと唇をかみしめたかと思つと、  
不敵に笑つて見せた。  
妖魔の脅しに屈してはいけない。

「ふん……アンタの粗末な触手なんかで  
私を満足させられるかしらね？」

「うひょー！ その『私は屈しません！ キリッ！』みたいな  
口調、いいねえー」

妖魔は小馬鹿にした口調を崩さない。  
それどころか、残忍に笑つと……。

「後悔すんならさ、ミカー」





「……ふんふん……おつ、おつ、おつ……」

「どうなり、妖魔は勢いよく触り、ミカカのマンツギを入れた。」



「……うん、うん……おつ、おつ、おつ……」

「ミカの下腹部は触手の形に膨れ上がってしまっている。それでも、子宮を突き上げ、肉の凶器は潜り込んできた。」

「ゴリッ」

「グッ」



「……うん、うん……おつ、おつ、おつ……」

く、苦しいっ！でも、私が耐えなきや……  
圭が……それはダメ！

あまりの苦痛に意識が飛びそうになるが、  
何とか踏みとどまろうとするミカ。

「んっ、はひひ……うっ、きんきん……」

「おっ、まだまだ頑張れるよなあ？  
さすが最強退魔師(笑)！泣かせるねえ」

「だ、黙れえ……」の、下劣な、妖魔があ！」



「こ、こんな触手なんかで、私をどうにかできるなんて……」

強がり口にしてしまったミカ。だが、股間に迫ったもう一本の影を見るなり表情が凍り付く。

「ぎひゃひゃ、どうやら最強退魔士さんにはこの程度の触手じゃあ物足りねえみたいだなあ。とんだ、どスケベ退魔師だぜえ！」

「なっ！ ま、まさか、もう一本、なんて……」

「おおあたりよお！ ぎひひ、二本も啜ると「みゃマン」も大満足だろ」





「ま、待って、そんな入るわけ……  
あぎやああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああああ  
あああああああああああああああああああー！」

「無理かどーかなんて知るかよ？  
関係ねえんだよ、ボケ、おほ、入るじゃねえか  
ボクッ

もう満杯だったミカのアソコに、  
無理やりもう一本触手がねじ込まれる。

「抜いてええええー！」「われえ、あがおへえええええ  
えええええー！」

「ん？どうした？ すっかり大人しくなっちゃまってよお人質がいるって」と忘れてねえか？」

妖魔の言葉に、薄れかけていた意識が引き戻される。内臓をぐちゃぐちゃにかき回される激痛に耐えながら、ミカは歯を食いしばる。

（た、耐えなきゃ……じゃないと、主が！それはダメよっ！）

最強退魔師の呼び名にかけても、負けられない。

「ん、こんな粗末なものでしか女を、屈服できないってわけね……」



「ミカっ！ 止めて、お願い  
ミカを助けて！」

触手に囚われた圭が必死に呼びかけるが、  
妖魔はいやらしい笑いを浮かべたまま。

「ああん、これはゲームだつてんだろ？  
先輩退魔師様が頑張りやお前も助かるんだよお、  
そこで応援してな」

「そ、そうよ……圭。うん……  
私なら、大丈夫だから……」

苦痛に悶えながらも、ミカは圭に  
微笑んで見せた。



「……まあ、でもよお？  
先輩頑張ってるのに、後輩が  
暇」いっちゃダメだろっつがよっ」

ミカと圭のやり取りを見ていた妖魔が、  
急にそう漏らすと、触手をうねらせて  
圭に近づけてきた。

「ひんぷんっ」

怯えて息をのむ圭。

「何をするつもりっ！  
圭には、手を曲さない約束でしょっ」

嫌な予感がする。  
ミカはアノコをほしくられながらも  
必死に声を上げた。





「ああん、別にいいだろうが。」

「気が済む」なんて殺してないだけマシだよ」

妖魔は小馬鹿にした口調を崩さない。  
残虐そうに笑うと、更に喉の奥深くまで  
触手をねじ入れた。

「んぐおおおおおおおおおおおっ……」

お、おっぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ……  
うぐ、みげげげっ……」

気管もふさがれ、主は窒息の恐怖に飲み込まれた。  
呼吸の苦しさに、喉が波打って触手を締め上げ、  
妖魔を喜ばせてしまう。

「おおぐれれれれ」

死にかけの女の喉は締めりがよくていいよなあ」



「主……お願い……おちちおちち……」

「だれ……だれ……だれ……だれ……だれ……だれ……」

（な、なに？ 喉の奥で触手が……  
太くなって……！）

捻じ込まれた触手が硬さを増し、更に野太くなって  
圭の喉を塞ぐ。  
呼吸も支配され、苦しさに圭は喘いだ。

「ん〜？」の先どっつなるか、予想がついたかなあ？  
そう、お楽しみ射精タイプで「すよっ」とー」

「ぐっ、ぐんぐんぐんぐん〜。うっ、うっほお  
おおおおおお〜」

「喜んで喉締めちゃって、可愛いねえ、圭ちゃんは〜」

「やめてやめてええええええっ！  
圭を助けてええええっ！」



ミカの悲痛な叫びも届かず、妖魔は大量の精液を  
主の口腔内にぶちまけた。

「んびゅああああああああああああっ……  
うぎゅん、ぎゅんぎゅんぎゅんぎゅんぎゅん……」

主の口では収まりきらないほどの、  
大量のザーメンを流し込まれ悶絶する。

「まだまだ出るのよ……ほら主ちゃん、もっく飲んで……  
零したらただしやおかねからなっ……」

「うぎゅんぎゅんぎゅんぎゅん……うぎゅんぎゅんぎゅんぎゅん……  
うぎゅんぎゅんぎゅんぎゅんぎゅん……うぎゅんぎゅんぎゅんぎゅん……」

妖魔に言われるまでもない。  
主にはただザーメンを飲み下す……としか  
できなかったのだから。



「ふひいいい、出した出した。  
なかなかのロマ○」だったせえ、「ちとつをまだなあ」

散々、主の中に精液を流し込んだ後。  
妖魔は満足そうに触手を引き抜いた。  
入りきらなかった精液が、主の顔を白く染める。

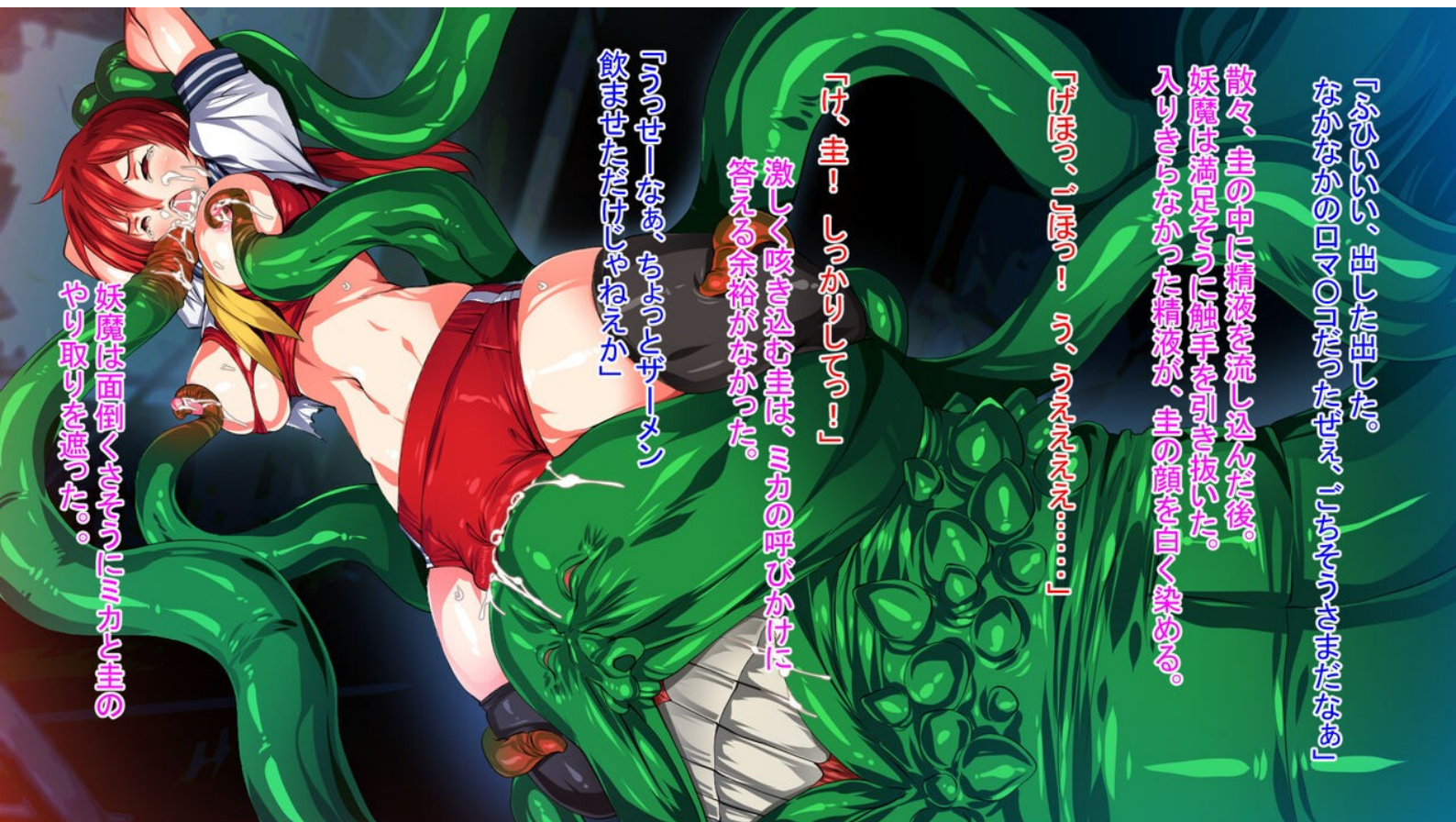
「げほう、「ほう」！う、うええええ……」

「げ、主！しっかりしてー」

激しく咳き込む主は、ミカの呼びかけに  
答える余裕がなかった。

「うっせーなあ、ちとつとサーメン  
飲ませただけじゃねえか」

妖魔は面倒くさそうに「ミカや主の  
やり取りを遮った。。。」

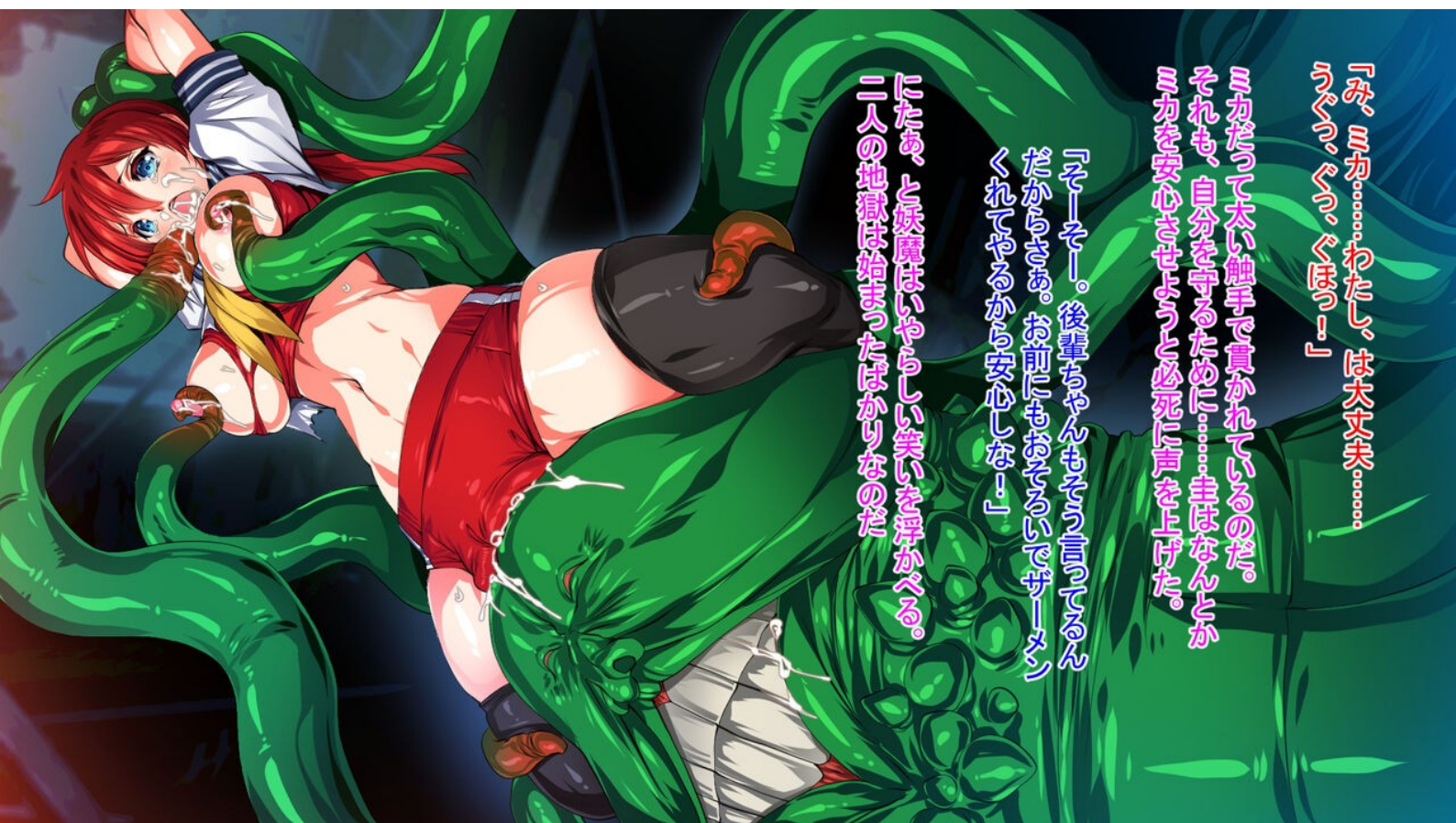


「み、ミカ……わたし、は大丈夫……  
うぐっ、ぐっ、くほう！」

ミカだって太い触手で責められているのだ。  
それも、自分を守るために……。圭はなんとか  
ミカを安心させようと必死に声を上げた。

「そーそー。後輩ちゃんもそう言ってるん  
だからまあ、お前にもおそろいでザーメン  
くれてやるから安心しなー！」

にたあ、と妖魔はいやらしい笑いを浮かべる。  
二人の地獄は始まったばかりなのだ



「いぐいぎああああああっ!!  
お、お、お大きくなってるっつっっ!!  
暴れっ!!」

突然襲い掛かった新しい苦痛に、ミカは絶叫する。  
狭い腔の中で、極太触手が二本、よじれ合って  
暴れまわっているのだ。

「言っただろ、オノロっつちやんてばー。  
ひひひ、「んやうてんめん」中  
ぐちよぐちよ「かき回」つねは〜」

「やめてやめてええっ!!  
お腹、破れっ……おっほおほおっ!!」

「ええろ? 先輩ちゃんも頑張ってるんだからさ  
先輩の根性見せてみるよお!!」

ミカが泣き叫ぶほど、妖魔は面白がって  
触手を激しく蠢かす。



「んほ、なかなか乙なマ○こじゃねえか、  
さあて、オレのザーメンの味はどうだったかなあ？」

ミカの膣内に溢れかえるほど精液を注ぎ込み、  
妖魔は満足そうに尋ねた。

「んっ……うっ……うっ……た、耐えたわ、よっ  
きあ、手を放して……」

ミカの瞳にまだ光が消えていないことを確認した妖魔は、  
更に残虐そうな笑みを浮かべた。

「おっひひまたまた「元氣」じゃねえか？  
そっじゃ、第ニラウンズ「元氣」じゃねえか？」



「おら、次は誰がやるんだあ？」

馬面の妖魔が、触手二本挿し凌辱を受け  
苦しげにあえぐミカの体を無理やり持ち上げる。

「待ってました！ 次は俺！  
俺の番な？な？」

「うぐっ……はっう、はあう……  
は、放して……」

馬面の妖魔が、触手二本挿し凌辱を受け  
苦しげにあえぐミカの体を無理やり持ち上げる。

「そう言われて放すバカはいませーん！  
グッ！グッ！グッ！」

先ほどまでの激しい凌辱のせいでぼっかりと  
口を開いたままのマ〇を晒す羞恥の体勢。  
ミカは悔しげに唇を噛んで、顔を赤らめた。

「は、二匹も相手するなんて約束、  
していないわよっ！ 早くまも放してー！」

声を荒げるミカに、馬面妖魔は  
下品な笑い声を浴びせた。

「それはあ、ミカちゃんの頑張り次第とゆーかあ。  
ま、とりあえずチンポ突っ込ませてよっ！」

「あ、あつたなごっ！」

「ちかちかあ、あつたなごっ！  
あつたなごっ！」

「ほっ、その証拠はもう「さっ」「さっ」「さっ」……」  
もう我慢できないよーっ「んっ」「んっ」……

でろん、と巨大なチ○ポがミカの股間の  
間からそそりたった。

「ひっひっ……」  
な、な「んっ」「れっ」……

それは、あまりにも巨大すぎる肉の凶器。  
形はまさに馬そのものの

ミカの華奢な体など突き破ってしまいました。

「うそっ、まさか、こんな……」

「こんな、入れるなんて……」





「イヤイヤ、入れる以外に何をするのさ？」

「ぐわっぐわっ、こいつでスッポスッポしてあげるからさあ  
腹が破けないようにふんばりな、ぷひひひんっ！」

「む、無理なおー！  
こんなの入るわけないっ！」

ぴゅっ、  
ぴゅっ、

ミカは顔を引きつらせて叫んだ。  
その表情に恐怖が浮かび上がるのを見て、  
増々妖魔たちは盛り上がる。





「け、主には手は出させない………  
はぐうっ！」「こ、こんなお粗末なもので  
私をどうにか…あひいっ！  
出来るなんて、思わないでっ！」

苦しみに悶えながらも、必死に主の「どき  
思うミカの発言。だが、それは逆に  
妖魔の残虐な心を煽ってしまった。

「ひっひっひっ…  
そうかそうかあ〜ミカちゃんは「れ」じゃあ満足  
できないんだね？ だったらあ」





「おはようおはようー」  
おはようおはようおはようおはようおはようおはよう  
あああああー」

「おいおい、ミカちゃん  
さっきの威勢はどっしたよあっ  
うん、腹が越しのフエラチオ  
気持ちいらぬーん」

妖魔の巨大すぎるチ○ポが容赦なくミカの  
マ○を挿る。

「おはようおはようー  
おはようおはようー  
おはようおはようー」



「お友達の」よ、忘れちゃってるんですかーん……  
あーっ、活きが悪くなっちゃった」

あまりの苦痛に、ミカの意識は飛びそうになる。  
ぐるりと白眼をむき、意識は暗闇に落ちようとした、  
その時。

「はい、気付け薬だよ！  
ぶひっひひんー！」

どばどばと亀頭から大量に精液が  
注ぎ込まれ、ミカの体が跳ね上がる。  
自分の腹越しにテ○ポからびゅくびゅくと  
射精する感触を口に味わうという異常な  
痛苦にミカは悶絶する。

「ぶぶぶぶぶぶぶぶ……んぐんぐんぐんぐん  
おぶほおほおほあああうー！」

「せうかくだからねえ、一滴残らず飲んでよねえ！  
ひーひっひっひひんーあ、中を出しているから  
口から飲めないかあ」

後から後から注ぎ込まれるザーメン。  
行き場をなくした白濁液が、結合部分から溢れかえる。



「へへーいやあ、出した出した」

どれほど経ったのだろうか。  
ようやく妖魔はペニスを引き抜いた。

「おっぱあ……あがががっ  
ぐっぐっ」

「ミカちゃん、びくびくしちゃって  
ようぼとチンポ良かったんだね  
チンポ舐めてくれる舌の感触も  
ベリーグッド」

「さすが、ピッチ退魔師！  
おチンポ大好き娘！」

妖魔の嘲る声も、もはやミカの耳に届かない。





「なめーて、まだまだザーメンまだまだ残ってるけど、次は誰使う?」

「お前、出しすぎだろ。きったねーな  
ギャハハハハ」

「あーっ.....あ、あ、あ.....」

「おあ.....」  
「ほ.....」

ぴ

びん

「さて、今度は俺たちの番だ」

「びびびびびび、だいたい待たされたからなあ……」

ミカの四肢を掴みあげると、エド反りの形に回め、  
二体の妖魔が前後に立った。  
豚の顔をした妖魔は、にやにやと下卑た笑いを浮かべる。

「う、う、う……は、放して」

リバースロメロのような形でキめられミカは  
痛みに顔をゆがめる

「ハア？、テメエ馬鹿か放すわけねえだろうが  
死ぬほどガン突きしてやつから覚悟しなあつー」

「俺たちの番が回ってくる前に、びび壊れちまつてじゃ  
ねえのか、心配してたけどよあ、  
退魔師ってやつは頑丈で助かるぜびびびびびびびび」



「まあ、でもあんまり待たされ過ぎたんでチ○ポがこんなになっちまったけどな」

でろん、と巨大すぎるペニスがミカの前へ突き出された。股間にも同じものを感じ、息をのむミカ。

「ひいっ！  
な、何、それ……」

「くっくっくっく、退魔師の女の恐怖に歪む顔、  
「これがたまらないよなあ……」

先ほどの馬型妖魔にも劣らない極悪な肉の凶器。  
ミカの顔が恐怖で歪む。

「い、いやああああっ！  
無理、もう無理……そんなの、入らないっ！」

「……なあんだ、もうギブアップか。  
そんなじゃ、後はもう一人で楽しむとするか  
ぎひひひっ」



「……」

ミカの瞳に力がよみがえる。  
そうだ、最強退魔師の誇りにかけて  
主を凌辱に晒すわけには行かない——っ！

「け、主には、手を出させないわっ！  
私が二人まとめて相手してあげる！」

「……笑わせてくれるねえ  
て」とは好きにやっつて良んだなあ？」

「す、好きにすればいいわ……」

ミカは精いっぱい強がりを入れて、妖魔を睨みつけた。  
だが、それはかえって妖魔の嗜虐心をあおってしまう。





「よし、目覚めの一発だっ、びびひっ」

「うっうっうっぽおおおおっ!!」

豚妖魔は前後から同時に腰を突き入れた。  
ミカの喉の奥深く、そして子宮に潜り込んで  
更に内臓を押しつぶしてペニスが侵入する。

「おっがああああああああああっ!!  
うほっ、ぐぐほへへへへへへへへへっ!!」

「よしよし、締めりも戻ってきたなあ、  
マ〇肉がビクビク締めつけてくるぜっ!!」

「びびひびひひ痙攣してるだけ、っだろお」

ぐんぐん  
びびる  
わんわん

「そんなじゃあ、潰しきつちまつ前」……

妖魔が腰を引くと、ずるずると  
巨大チ○ポが引き抜かれる。

「おっほおおおおオオオ……」

「は、早く抜けてえ……はやくはやくはやく」

不自然な形で折りたたまれた体に、喉を塞ぐ肉棒。  
子宮を押しつぶすチ○ポ。  
どれもがミカを苦痛と絶望のどん底に陥れる。

「ふひひひひひっ、カリがゴリゴリ」すれて  
「マ○」がキュウキュウいつてやがる

全てが抜け落ちるぎりぎりまで引き抜かれ、そして。

ガッ

びびる  
びびる  
びびる

びびる  
びびる  
びびる







「ん、雌の子袋にザーメン流し込む」の幸せ♪  
たまらんなあ〜ぶひひひひひっ」

うっとりとした様子の妖魔は、延々と精液を吐き出し続ける。

「おがあっ……あ、あ、あ、ぶ、げ……」

喉に注ぎ込まれる精液は胃袋をまん丸のボールになるまで押し広げ、子宮はありえないほど膨らまされ、結果、ミカの腹部はザーメンの詰まった巨大な肉袋となった。

(も、ダメ……  
ザ、ザーメンで溺れるう……妖魔ザーメンに殺されるう……)

びゅる  
びゅる  
びゅる

ぶいぶい  
ぶいぶい  
ぶいぶい



「あ……」

くるんとミカの腫が裏返り、白目をむく。  
ついに、ミカの意識が途切れてしまったのだった。  
だが、妖魔はまだそれに気づいていない。  
退魔師に「ザーメンをぶち込み」と「夢中なのだ

「ふうふうん、肉袋が良いとまだまだ出るな  
棒名ミカを犯すためにザーメン溜めて来たからなあ」

「だよなあ、並の退魔師はすぐにつぶれちゃったしな  
やっぱり有名な退魔師だと肉持ちが良せえ  
びび」

「……め……主……  
も、もう、い、意識が……」



「うんっ、うんっの間にか落ちてんぞ、コイツっ」  
ようやく、ミカに意識がないことに気づいた豚妖魔達が  
チ○ポをそれぞれ引き抜いた。

引き抜かれた途端に口とマ○コ、両方の肉穴から  
ドバドバと精液が噴水のように吐き出される。

「ぶひひん！ フザマだねえ！

皆さん、この精液袋が最強退魔師ミカの今の姿ですぜえー！」

ミカの体はザーメンを吐き出すためにビクつく

皮肉なことにそれがミカがまだ生きている証拠だ。

「お、まだ生きてるじゃねえかッ

んじゃ、まだまだイケるなあー！」

ミカの意識は途切れたが、まだまだ凌辱劇は  
終わりそうになかった…

更に数回串刺しサンドイッチにされミカはようやく  
豚妖魔から解放されるのだ。

びゅるるる

どぶしやぬぬぬ

豚妖魔による更に数度の串刺しファックが終わりどさっとミカは地面に投げ捨てられた。口から、膣から、アナルから。ザーメンがとめどなくあふれ出す。

どれくらいの時が流れただろうか。ようやく、詰め込まれていた精液がすべて外に流れ落ち、妊婦のように膨らんでいた腹部も元通り平らになった。

退魔師であるが故の屈強な体と精神のせい、ミカの意識はゆっくりと戻らつていった。それは凌辱が更に長引くことを意味するそのまま、気を失い続けていたほうがよっぽどマシだったのかもしれない。



「う、くっくっ……わ、私は」

目覚めたミカは、恐る恐る体を動かそうとしたが。

「きゅんきゅん……あ、がはっ！」

指一本まともに動かせない。  
全身をむしばむ苦痛。  
性器は無惨にも広がりきり、  
赤い粘膜ヒラを曝け出したまま。

「上級の妖魔たちは……どこへ……  
け、圭は……まだ、無事なの……」

「ここまでスタボロに犯されても  
ミカは圭の身を案じた。だが、彼女への制裁が  
まだ終わったわけではないのだ。

「ぞ、残念、だなあ！ お、お、お前は  
俺たちのもんだあ！」

「そ、そんな！ 下級妖魔がこんなにも！」



「何だよマ○」はガバガバじゃねえか。  
ケツからやっつくかあ」

股間に陣取った一匹が、ミカの肛門に  
チ○を埋め込む。

「ふんむんむんむん……」

それまでの凌辱によりミカのマ○はもう低級の妖魔では  
なんのンマリも得られなれば「ガバガバ」になっている。

「ケツのしまりは悪くなえなあ」

「ぎゃはははは……そんなざつ壊れたお尻は「POINT」  
使っわけないよなあ……」

「ぶぐおおおおおっ……ん、ん、んっぐうっ……」

アナルを強引にまくり上げられ、ミカは苦痛に喘いだ  
口を塞いだ肉棒のせいでぐもった悲鳴しか出ない。



「それじゃあ、触手ならいっぱい入るだろ」

「お、名案！。何本ぶち込めるかなって」

壊れかけたマ○コには、野太い触手が何本も  
捻じ込まれた。

「ぐもおおおおおおおおおっ……」

おおおおっ……ふんぐおおおおおっ……」

「おぐ！おおおぐぐぐ……お腹破れるん……」

激しくのたうつ触手は、直腸のチ○コと絡み合いながら、  
ミカの子宮まで潜り込んだ。  
腹の薄皮を盛り上げて、ぽぽぽと湧る触手。



「あぎやぎやぎやおおおおおおおおおおおっ……」

ミカの悲鳴が裏返る。  
無防備な乳首にも触手が狙いを定めたのだ。

「乳首いたたまき……」

聖の乳首を

「んぎゃー……ああおおおっ……ぎゃひっ……」

先端にとげの生えた触手が乳首の中にもり込む。

「乳首ってさあ、案外いい締めつけ  
なんだよなあ〜」

ぐほぐほぐほっ……

ぐちゅるるるるっ……

肉の凶器がミカの乳首をいよいよ「ほ」くり返す。

「あ、お前すらい！俺も「うちの乳首使ってやるぞー」」

左胸にも触手が殺到する。  
左胸に刺さったイボ触手に対してドリルのような触手が二本、ミカの胸をえぐりまくる乳首を強引に押し広げ、胸肉の中にまで押し寄せる触手に、ミカは目を見開くしかできない。

「いやいやいやいやああああああああー！  
もう触手はいやあああああー！おっぱい壊さないでええええー！」

「LULULU、女の胸の中もマ○コみたいでいいよなー！」

ロ、アナル、マ○コ、そして乳首。  
ありとあらゆるところで肉棒が暴れまわり、そして。



「お、出るぜっー」「俺まり飲みやがれえっー」

「……」

ミカの体中で肉棒が跳ねまわり、びゅくびゅくと精液を吐き出した。大量の白濁液があっという間にミカの胎内を埋め尽くした。

「ぎひひ、下級妖魔の俺たちが、あの様名ミカにザーメンぶちまけてやってるぜえっー！」

「ぶっげえええええええええ！ おぶぶぶぶっー！」「ぶああああああっー！」「ぶっっ、ぶ、ぶきいっっっー！」

ミカの体中で肉棒が跳ねまわり、びゅくびゅくと精液を吐き出した。大量の白濁液があっという間にミカの胎内を埋め尽くした。

身勝手の射精を終えると、下級妖魔たちはミカの体から離れていった。

「いっお……ぐ……ぐ……」

残されたのは、惨めにも穴と言う穴からザーメンを吹き零しながら、痙攣するミカの姿だけ。

「ふっこれで終わり……っも、もう、いい加減にお、終わって……」



「おらあつー」これで終わりだと  
思ってたじゃねえだろうなあー！」

ミカの願いはかなわなかった。  
転がったままのミカの姿を  
見つけたほかの妖魔が、  
再び口にチ○コを押し入れてくる。

聖○を

「う、あ……そ、そんなも……  
も、もう、いやあツ!!  
妖魔たちは何体いるのよあつー!!」

「めえをぶち犯してええと思ってるヤツめ  
幾らでもいるんだぜあつー!!」

全員相手させるまで伸びてんじゃねえぞあつー!!」

ピクピクと惨めに痙攣を繰り返すミカの体に、  
またしても妖魔たちが群がってゆく。  
ミカが何体の雑魚妖魔に犯されたか?  
そんな数はすぐに数え切れないほどになっていった。

一方、主は巨躯の妖魔に大股開きで拘束されていた。ミカが雑魚妖魔にマワサされている様を拘束された状態で見せつけられているのだ

「ほ、話が違う！ ミカを放してよう！」

「何を言っている。あんな与太話を真に受けるお前らが馬鹿なんだろうが」

「そんなう！ じゃ、じゃあ私を責めればいい！ その代わりミカを……！」

先輩退魔師が無惨に凌辱される様を見せつけられる。それも自分のせいでも……主の必死の懇願に巨大な妖魔はいつと笑う。

「良いねえ、そのお手本みたいなセリフ。やられそうになってもお互いかばい合っなんて泣かせるねえいい退魔師になれると思うせえ、あの肉便器みてえになあギヤハハハハハ」

「そう、はなから騙すつもりだったってわけね！」

「妖魔がそう都合よく言つ」とを聞くわけ無いだろうがよぎヒヒ、ホント退魔師なんざバカだねえ」

まは悔しさのあまり小刻みに体を震わせる。  
私のせいだ。  
私をかばうために、ミカは……

「ほ、他の退魔師や退魔特捜の救援が来るわ。  
アンタたちなんか消し炭になるわよ！」

「その前にお前らが持てば良いがなあ、  
お仲間の退魔師が発見するのは生々しく見えて  
やりつゝされたデメェラの成れの果て……」



「ま、」ちや」ちや」つるせえガキには  
「イツをフチ込んで大人しくなってもらうか！」

巨大なチ○コが圭の股間に押し当てられた。  
その大きさに、圭の顔がさうと青ざめる。

「えっ……ひいっ！ な、なによ、「これ？」

「お前、処女だろう。初体験がこんなでかいチンポに  
なるなんて、嬉しいだろお！ 退魔師」っ」っいでに  
初めての経験っっ」のも悪くねえぞお」

「そ、そんなわけないでしょう！  
ふ、ふざけないでっ！ っんな汚いもの……  
わたしがへし折って……」

ずん

「Eeeee、震えちゃって可愛いのなあ  
退魔師なんてイキってもただのメスガキか」

嘲るような妖魔の声に、  
主は必死に声を荒げて抵抗する。

「ば、バカにしないでっ！」

退魔師はそんな脅しに屈したりしないわっ！」

「や、やめ、むぐうっ……け、主だけは、あぐう」

雑魚妖魔に犯されながらも必死に呼びかけるミカ  
だが、そんな姿は妖魔にとっては滑稽な  
見世物でしかないのだ。

「そうかそうかあ、そんなじゃあ見せてもらおうか  
退魔師の矜持っっーやつ……」





「ぬいてぬいてぬいてぬいてええええっ！  
「われるっっっっっっっ！」

激痛に苦しみ悶える主。だが妖魔に鎖で縛り付け  
られている主はのがれることはできず、  
その足をがっちり掴み、妖魔はいやらしく笑った。

「何だよお、まだ亀頭しか入れてねえんだぞお」

「いっきやあああああああああああああっ！  
いだいだいだいだいだいいいいいいいいいっ！  
ミカあ、助けてえ、お腹あ、お腹裂けるっっっっ！」

初めての体験がこんな苦痛になり替わるなんて。  
主は泣き叫びながらミカの助けを求めるのだった。



「やっぱり女の泣き顔はぐっぐんめよなあ  
おまえは顔してみせ〜」

「う、う、う……いい、痛あ……  
も、やめ……」

「……何だあ、もう誤りだしやがって  
調子」いてたくせにただの雑魚かよ」  
妖魔は冷めたような口調でそうつぶやいた。

「へへっ、残念だナァー  
退魔師とか言ってるイキってよお  
すぐに先輩助けて〜ってか  
もうちよつと踏ん張って見るよ、おい！」

股間は引き裂ける様に痛むが、  
妖魔の侮蔑の声は圭の心をさらに鋭く扶った。

「……じゃない」

「ん？  
何か言ったかあ？」

「あ、あんたみたいな下衆妖魔に  
屈するわけないじゃない！」

処女喪失の痛みに震えているが、  
まは必死に眉を吊り上げて叫んだ。

こんなことでミカの信頼を失って堪るものか。  
眼の前で犯されているミカ。そんなミカのためにも耐える  
そう決意するのだが

「退魔師は妖魔の言いなりにはならない！  
お前も必ず倒してやるんだから！  
その首へし折ってや……るんだから……つき」

「それぞれ！ そういうのが聞きたかったんだよな！  
退魔師は妖魔に屈しない、キリッ！  
見てえな、クソ無駄な抵抗をよお！」

「良かったぜ、まだまだ楽しめそうだな！  
それじゃ処女喪失チ○ポ串刺し刑続行！」

妖魔は嬉しそうに馬鹿笑いすると、  
チ○ポの瘤が浮かび上がった部分までを  
さらに圭のマ○コにねじ込んだ。

「え……なに、いだあああああああああつ！  
痛っ、いだあああああああいいいいいいいっ！  
あつぐああああああああああつ！」

圭の下腹がポコリとヘリスの形に浮かび上がり、  
さらに瘤までもが浮かび上がる  
凶悪チ○ポは容赦なく粘膜を引き裂き、圭に激痛を与えた。

「ククク、たまらねえだろ、このチ○ポ！  
退魔師の雌穴をぶつ潰すための特製だぜ！」







ずるり。  
長い時間をかけて、ようやくチ○コが引き抜かれた。  
栓を失い、「ほっ」と精液が流れ落ちる。

「あ、ぐっ、あ、あひっ……」

「くくくく、最高に思い出に残るロストバージン  
だったろお？ ひひひひひひひひ  
てめえの処女奪った相手の「と忘れんじゃねえぞ  
退魔師」っのお嬢ちゃんよお  
ヒヤーハッハッハ」

妖魔は惨めな主の姿を見下ろし、心底楽しそうに  
笑い続けた。その耳障りな声を聴きながら、  
主の意識は次第に遠ざかっていった。

「ミカ……た、すけ、て……」



「さあーっとと、今度はボクの番かなあ」

雑魚妖魔に散々弄ばれたミカ。

この場に似つかわしくもない無邪気な声が出たかと思つとミカは触手で空中に吊り上げられていた。

グロテスクな形の触手は、ミカの四肢をぎゅうぎゅうと締め上げ、関節に痛みを与える。

「くっ、くっ……あ、あなたは……！」

女退魔師を子供の姿で油断させて襲う妖魔だ。だが、今はその本性を隠すつもりは無くハナから全裸で異常に伸びた触手ペニスを見せている。

妖魔に散々弄ばれた、あまつさえ救おうとしたままでも無惨に処女が奪われてしまった。さしものミカも自分の心が今度こそ本当に折れていくのがわかる。

「いひひっ、ボクの事知ってるんだねえ嬉しいなあいい格好だよねえ、ミカさん？ボク、お姉さん見たいな強い退魔師をメチャクチャにするのが大好きなんだよねえ」



「や、やめ……もう、はなし……」

「いやいやいやあ？」

「これからが楽しいんだよお。」

お姉さんのやられ姿見てたら我慢できなくなってきたお

そのスケベな体で遊ばせてね

ボクの手○ポ、全部ぶちこんで上げるよお」

ミカは背後を振り返り返り驚愕する。  
大きく開かれた股間には、  
少年妖魔の股間から枝分かれした  
無数の触手が集まっていたからだ。

「う、嘘……そんなに……」





びしょ濡れ〜!〜!〜!  
あぐんぱんぱんぱんぱん〜!

再び股間が引き裂ける激痛。  
腹が破裂しそうな激痛。  
ミカは恐怖で顔をこわばらせて泣き叫んだ。

「えっ? 何言ってるの?〜  
〜!〜!〜!までやられとてバカなの?〜

〜!〜!〜!からが楽しいんだって。

ほら、お腹が変な形に膨らんでるでしょお  
内臓のこの部分が気持ちいいんだよね〜!

びしょ濡れ〜!

カッ

ボグッ

ゴグッ

ポッ

「おおおおお尻壊れるワウワウワウ〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!〜!





「お……お……」

猛烈な吐気が  
ミカをおそつ。

「わ、私のお腹……どうなの……  
怖い……いや、いやいやいやあ……」

「あっあっっっ  
もうすぐだよっ……  
ホラホラ、お尻もっつと広げてっ」





「うん、ミカさん見たいなっよーい(笑)  
退魔師は触手まみれがよく似合うねえ  
どう？体の中、触手つけたになった」感想はあ？」

妖魔はにやにやと笑いながら  
ミカに問いかけるが、ミカの意識は段々と  
遠ざかりつつあった。

「んっ、お……んっ」

肛門を引き裂く痛み。  
内臓をぐちゃぐちゃにかき回される苦痛。  
気道を塞がれた恐怖。  
全てがミカを襲う。



「あれ？返事がないなあ  
足りないって」ど？  
そんじゃ追加ねー」

「んぐもおおおおおおおおおおおおっー」

妖魔な息も絶え絶えなミカの唇に  
更に触手を押し込んできた。  
顎関節がきしみ、ミカは目をむいて悶える。

ぬん  
ぬん  
じやぶ  
じやぶ

「今度は口から逆行するよー  
ほら、食道を抉って、胃袋…  
はは、もう胃も満杯だったけど、  
気にせずれっつー」

ぐん

ぐん  
ぐん



「ぶぎやげおばああああああああ〜！」

びびる

ぶりゆりよあああ！！  
メチメチメチキイツ！！  
勢いよく肛門から  
触手が飛び出す。  
ミカの括約筋はもう  
ずたずただった。

(おおおおおお尻  
「これだああああああ〜！！」)

ブル

バツ

ポッ

あああ

「退魔師とはいえ、よく保ってるよねえ。  
やっぱり触手が大好きなんだねえ  
流石どスケベ退魔師お姉さん！」

詰め込んだ触手の数が新記録う〜！」

ぶしゃ

(どスケベでも何でもいから  
もう抜いて抜いて抜いてえええええ！)

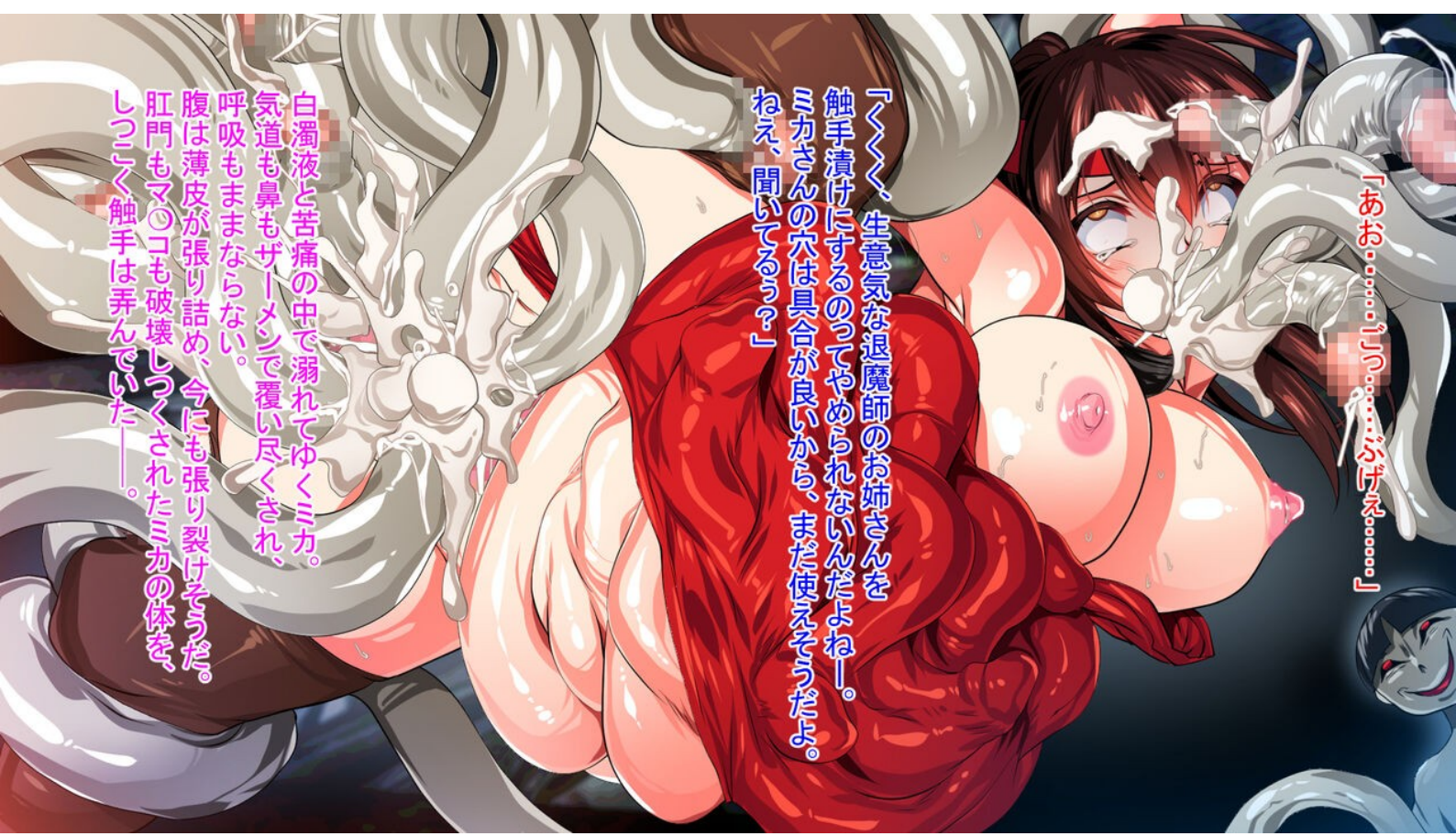




「おお………ん………ん………ん………」

「くくく、生意気な退魔師のお姉さんを  
触手漬けにするのってやめられないんだよね。  
ミカさんの穴は具合が良いから、まだ使えそうだよ。  
ねえ、聞いてるっ。」

白濁液と苦痛の中で溺れてゆくミカ。  
気道も鼻もザーメンで覆い尽くされ、  
呼吸もままならない。  
腹は薄皮が張り詰め、今にも張り裂けそうだ。  
肛門もマ○コも破壊しつくされたミカの体を、  
しつこく触手は弄んでいた――。



全身の穴に触手を挿し込まれ、文字通り触手漬けになったミカ。だが悪夢はまだ終わっていないかった。意識を取り戻したミカは再び妖魔にその傷ついた身体を掴まれていた。自分の数倍はありそうな体躯の巨大な妖魔。そして周りにも同じような巨大妖魔が先走ったテンポをミカに突きつけている

「う、うぐうぐわたし、動けな……」

巨大な手ににぎら……放し、て……」

「お、目が覚めたあ、ミカお姉ちゃん？」

次は大きいお兄さんの相手を頑張ってもらうよ  
サイズ感が違い過ぎるけど  
頑張ってるねー(笑)」

ミカを犯し切った少年妖魔の声が聞こえる  
少年はこれから起こる悲惨なショーの開始を  
心待ちにしているようだった

「お、おん、ういでお人形遊びするっ  
ナン「すほすほして気持ちよくするman」

「な、何の……  
お人形……ま、まさか」

ミカは苦痛に喘ぎながらもその言葉に言ざめた。  
自分を身体ごと握りしめている巨大な妖魔……  
過去、ある退魔師が巨大な妖魔に敗北した末路を  
思い出したのだ。

その退魔師はあまりの体格差に原形をとめないほどに犯され完全に破壊された状態で発見されたのだ。当たり前だろう、明らかに胴体よりも太いペニスである一般人、いや並みの退魔師でも即死する代物だ。

「お、おで、お人形遊び、好きいだ、退魔師、オナホールにして遊ぶううう！」

「ひいっ？」

う、嘘でしょ？なんなのそのサイズ……？

あれを私に……

い、い、い、いやあああああああっ！」

ぬう……

ミカは絶叫する。股間に押し付けられたのは、あまりにも太すぎるペニスの姿だった。更には同じように巨大で愚鈍そうな妖魔達がミカを取り囲み、そのペニスを向けているのだ。この妖魔もそんな体格差など気にすることなくその巨大なペニスを捻じ込みようとする。そしてその予感的中してしまう。

「おほっ、チンポがぐりぐりしてきほちいい  
ホラホラ、おでの大きなチンポが入るぞお」

「いやいやいやいやああああああっっっー  
止めてやめて、もう壊れるっっー  
死んじやんじやんじやんっっー」

ぐっちや  
ぐりっ

ミカは恐怖のあまり絶叫する。  
ぐちよりと亀頭が傷ついた粘膜ピラに  
押し付けられ、全身から冷たい汗が吹き上がる。

「大丈夫う大丈夫うだあ」

榛名ミカは最強の退魔師だって聞いているだあ

「これくらい平気だあ、それに心配すんなあ……壊れたら  
おまえ捨ててもう一匹の雌「すん」のえげひやげひやげひや」

「うー！  
け、圭にこんなヤツの相手をさせるわけに……  
わ、わたしが耐えないと……」

「げひやははは、ほうらふち込むだあ！」

妖魔は巨大。ニスを一息にミカの胎内に突き入れた。  
くぼおおおおおおお！  
子宮を押しつぶし、ミカの体がペニスの形に変形する。

「あつぎやああああああああああああああおおおおおおおおおおおお  
おおがあああああああああああああああつ！」  
巨大なチンポ型に膨らんだ  
その姿は、まさしくオナホールそのものであった。

「うひひひ、オナホールいつちよ上がりだあつ！  
ほらあ、大丈夫だあ！」



「おつがあああああ……あ、こ、げ、げ、お、お、お、お  
ぬ、ぬ、ぬ、ぬい、て……」

ミカは息も絶え絶えにつぎやぐ。  
臓腑をペニスで持ち上げられ、呼吸もままならない。

ボコッ

ペッ

ちぐちぐ  
た……  
ぢぢぢ

「うっん、せつかく入れたのに？  
しょうがないなあ？」

ずるるるるるるる。

巨大。ミカは臍肉をひっかきだしながら、引き出されてゆく。

「ん、カリ首「マン」の中の肉が当たって

「これは」「れ」で気持ちがいいなあ」

「うん、うんええっ！ な、ないぞ……

出さばばばばばばばっ！」



「マン」は裏返り、子宮までも引き出されそうになり  
ミカは絞りだすような悲鳴を上げ泣き叫んだ。

「なんだあ、せうかく抜いてちゃってるの」  
文句を言うなあ  
そんな「言」ならな「い……」



ずんっ！  
ずんっ！  
ずんっ！

ペニスは何度もミカの胎内を往復する。  
そのたびに、内臓は押しつぶされ、粘膜は引きちぎられる。



く、苦しいっ！ も、もう終わって……  
も、無理………  
無理………  
(無理………)

圭の身代わりになる……という決意は、ミカにはない  
巨大妖魔に犯されるという事が  
どれほどの地獄か、ミカはその身を背負って  
今、思い知っているのだ

「んっ？ 何だあ、イキが睡くなっちゃった……  
オデ、もっと気持ちよくな……  
まだまだ、終わりでやねえ……」

「お、終わりじゃ、な……うん」「んっ……  
き、きいっ、お、おおきくなっ………  
おっ」「おおおおおおおおおおおおおお」

奥までねじ込まれたペニス、更にむくむくと太く、硬く  
膨張してゆく。どれほど巨大でもその前兆は  
それまでに自分を犯してきたブツと変わりない

クク…

びんっ  
びんっ  
びん

「びんっびんっびんっびんっ、ユウユウしてんだあ…  
まっ、お、オメHEHEHEっだんてっ、おっがねえっ  
思ういきらフナメケナもあなっ」

「ひんっひんっひんっひんっ  
いや、いやああ、射精ダメえ、ダメ  
死んじやっ、」の状態で出されたら死んじやっ」

「お前のザーメンだっー！  
たらふく飲み込めえええー！」

どぶしゃあああああああっ！  
ミカの傷ついた体内に大量の精液が放たれた。

「めいじりじりじりぐぐぐぐぐはあああああああ  
あああああああああああああああああああ  
ぐぐぐぐぐあああああああああああああああっ！」

あまりにも大量の精液は、あっという間にミカの胎内を  
満たし、結合部からあふれだした。  
胎内から精液で爆発するのではないか、そんな絶望が  
ミカを覆い尽くす。



「んんひひひひ……ますます出ただなあ〜」

ずるり、と妖魔はペニスを引き抜いた。  
「ほ」ほと音を立てて精液が開きつぱなしの  
ヴァギナからあふれだす。

「がっしっ……ほろっ……」 おおお……」

ミカはビクビクと痙攣を繰り返すばかり。  
ズタボロの無力な肉人形を掴みなおし、  
妖魔はにたあと笑う。

「いひひいお前具合いいお人形だなあ、  
普通の退魔師と違ってオデのテンポで  
死なねえし、気に入ったなあ、

まだまだ可愛がってやるでおほほんらオデの  
兄弟たちもテンポそっえてんだあ」





「はなしてっ！ 放してっば！」

「なあにいつてるんだよお  
やっと俺の出番が回ってきたんだぜえ？」

それは「この」連の凌辱劇を仕組んだ低級妖魔の姿だった  
圭を餌に榛名ミカをおびき出す。その策略を仕込んだのが  
「この猿のような妖魔だったのだ。」

(ミカは……ミカはどうなっているの？  
切り抜けるには？)

「七瀬圭だったかあ？  
テメエのおかげで榛名ミカをぶちのめせて  
妖魔側からしたらしゃつたりよお」

圭はその言葉にぐうの根も出ない。  
もがきながら、圭は必死に考えるが、思考は  
ぐるぐる回るばかりで形にならない。

「くうくうくう！身体さえ自由なら  
あんたなんか……！」

主は必死に背後の妖魔をにらみつける。

「ぶひひひひひひ、可愛いねえ、  
頑張つてイキがっちゃつてさあ  
処女膜ぶち破られた割には元気じゃねえか」

「この雑魚妖魔あ、！  
絶対、絶対ぶちのめしてやるっ！」

「様名ミカは、もうお終いよお、  
メ手ヤクソにやられまくって

後は下のメさせられるだけ、残念だったなあ  
ま、お前の相手は俺がしてやつからよ  
お互い雑魚同士仲良くやるっぜえ」

妖魔は生臭い息を吹きかけながら、  
主に腰を押し付けてくる。

「や、やめてっ！  
変なモノ押し付けないでっ！」

「変なモノって……」れかあい？」

尻肉から腰に掛けて生暖かい、質量のある長いものがのしかかる。背後を見た圭の顔が引きつる。

「え……ひいひい……  
な、何それっ……」

ずるっ

それは、まるで蛇のように長いペニスだった。太さも圭の二の腕ほどもある。そのダロテスクな肉蛇はクネクネと動いて圭の柔肌に亀頭を擦り付けるのだった。

「これを、おケツ穴に挿し込んでやるのよおマ○の最初ランテ破ってやりたかったけどおケツ穴の処女を我慢してやるせ」

「い、いや、お尻に、そんな……  
いっきいいいいいいいっ！」

抵抗するまには構わず、妖魔はブルマを押しつけて  
ペニスを肛門に突き立てた。

「ギヒヒ、ケツマ〇〇処女いただきい！」

肛門括約筋は限界まで引き延ばされ、まは脳天まで  
駆け上がる苦痛に悶える。

「ガキの割に鍛えてやがるからキユウキユウ締め上げ  
てきやがう、とんだどスケベだなあ、おい？」

「い、痛あああああぁあぁっ！！  
いや、いやあああぁあぁっ！」

「肛門が真ん丸に広がっちゃったよお  
見せらんねえのが残念だなあ」



「ほら、腸の角をガンガン小突いてるぜえ！」

くぼくぼと尻肉の中を逆行するペニス。  
ずんと突き上げられ、圭の腹肉がペニスの形に  
浮かび上がる。

「……っがあああああああああっ！」

「おーききき、俺はよお、メスの退魔師が  
ケツ穴穿られて泣き叫ぶのがたまんねえのよ」

かし

肛門を引き裂かれる痛み。  
内臓を抉られる苦痛。  
その二つがまに同時に襲い掛かった。



「あがつ、ぎ、いいいいい……  
う、げええええええええう」

まはつぶれたカエルのような悲鳴を出し、  
ガタガタと震える。

「そう、その顔お！ 尻穴壊されて、  
腸をぐちゃぐちゃにチンポでかき回されると  
皆、そんな顔するんだよなあ」

喋りながら、妖魔は右に左にペニスを回転させ、  
主の肛門を拡張しようとする。

「てめえのケツもメッチャクチャに  
抉りたおしてやつからなあつ！」

「やめっ、あ、あうがあああう……  
おどり、「われりりりりり」





「ぶつぶつぶ〜カエルみてえな腹になってきたなあ。  
どうだあ？雑魚妖魔のザメンは美味えかあ？」

延々とザメンが注ぎ込まれる。  
主の腹は妖魔の言う通り、妊婦のように  
膨れ上がってしまった。

「くっくっく〜うなぎ〜くっく〜  
くっく〜くっく〜くっく〜くっく〜くっく〜」

（な、なんなのこイツァ、一体いつまで吐すのさっ）  
腸がパンパンに膨れ上がっても  
射精は止まらぬ。主の腹部の薄皮はもう  
はちきれそうだ。



「びびびびびび、射精射精♪  
ホラホラ、もう胃まで上がって来たぜえ？  
俺はよお、雑魚妖魔だけよお  
チンポの大きさと出せる量には自信あんだぜえ」

「んんんんんん！！！」

圭の顔色が変わる。  
何かが、いや精液が。  
喉元まで迫ってきているのだ。

「腹ア、パンパンだろお？  
我慢し過ぎは体に良くねえぜ、  
オラ、もういっちょ出してやらあつー！」

びびくびびくびびくと  
ピストンしながらの射精が  
さらに勢いを増していく

(い、いやあああああつー！  
怖い、怖い、怖い！)





「あー、最高最高うー！ 退魔師は丈夫だから  
好き放題出来るけどよお、並の退魔師なら  
ここまでやるとおつ死ぬからなあ。  
てめえ才能あるぜえ、もちろん肉便器のなあ」

妖魔は満足そうに腰を振り続け、圭の  
緩み切った肛門をさらに挟む。

「うっほおおおおお……げげう」

「んってめえのケツ穴気に入ってたわあ。このまま  
ペタリしちゃってもいいね」

「ミカあ、助け……」

「ああん？ 氣い失うんじやねえぞ  
これからが榛名ミカの最期のお楽しみなのだよお」

「妖魔の言葉通り、この後圭は  
悔やんでも悔やみ切れぬ  
人生で最悪の経験をする事になるのである」





「それじゃ  
それじゃあ、最強退魔師処刑シヨ一のはしまりだぜえ」

不吉に笑う妖魔達。  
その言葉に震えたミカが視線を下した。  
その瞬間……。

「え？……な、何、それ……  
嘘、でしょ……だって、そんな……」

ミカの顔が更に青ざめる。  
股間に近づいているのは、  
肉塊から競り上がってきたあまりにも  
巨大すぎるテ〇ポだったからだ。

「震えちゃって可愛いねえ、ミカお姉ちゃん！  
でもさあ、冗談じゃないんだよねえ」

少年妖魔が心底楽しそうに笑う

「無理！無理無理無理無理っ！  
入るわけ、ないいっ！お願い、やめてえー！」

「おうおう、情けねえなあ、  
そんなに怯えちまってよお！  
お前だって俺たちを散々  
祓ってきただろうが！」

「死ぬ、死んじやう！  
そんなの入れられたらあああああっ！！」

ミカは恐怖のあまり絶叫する。  
そんな無様な退魔師の様子を、妖魔は  
高笑いしながら嘲った。

「大丈夫大丈夫、さっきまで  
散々オナホ扱いされちやってるから、  
簡単に入っちゃうんじゃない(笑)」

「だったら、また大きく拡げてやるよ。  
へへ、親切だろお？」

極大オポの周囲に無数の触手が群がって伸びてきた。  
ミカは絶望と恐怖に目を見開きながら  
その様子を凝視する。としかできない。







「んおお…………お、この、げげげ、ごー  
う、うぎぎ…………」

「すっ」おいーこのチ○ポ入っちゃうとはね  
さすがのどスケへ退魔師いー」

「んー。でも黙っちまったよなあ  
死んだかあ？」

「…………………………………………………………………」



ミカは途切れ途切れにつぶやく。  
もう、痛いのも、怖いのも。  
もう終わらせてほしい。  
ただそれだけを祈った。

「は、いぬ……」

も……む……り……おん……い……だ……」

「イヤイヤ、ダメでしょ、あきらめなさい」

「そりゃもう……だから生命の元を……」

巨大子のボから大量のサーメンが吐き出された。  
ぱんぱんに肉を詰め込まれた臍内に余裕はなく、  
あつという間にある隙間から白濁液が溢れ出す。

「あ……あ……」

「は……は……」

「は……は……」

「は……は……」

「は……は……」

「退魔師大好物の妖魔特濃サーメン……  
人生最後に味わってるわさう……」





そりゃ。

「oooooooooooooooooo~」

ねっとりとした精臭に満ちた闇の中、  
それでもまだミカの体に精液を注ぎ込む音。  
粘膜が引き裂ける音。  
ギンギンと関節がきしむ音。

その音をバックに  
宿敵への制裁を果たした妖魔の歡喜の雄たけびと  
主の絶叫だけが響き続けるのだった――。



無数の妖魔がミカの肢体に群がっている。  
極太チ○ポをマ○コに突っ込む者。  
乳首を触手で拡張し、ほしくるもの。

「……………」  
だが、もはやミカはなんの反応も示さない。  
ただ身体中を抉りぬかれるままだった。

「けっ……」つなると最強退魔師も  
残りカス見てえなもんだなあ」

最初にミカを犯したチ○ポ妖魔が身体ごと捻じ込み  
アナルを何本もの触手でほしくってつぶやく。

「違いねえなあ、ブエエ」

豚妖魔が胸にいぼチ○ポをツツコんで賛同する

「ま、穴がある限り使っけどねえ！ キヤハハッ」

もう片方の胸に何本もの触手チ○ポを捻じ込みながら  
少年妖魔が楽しそうに笑う

「そうそう、喉マ○コもまだまだバツチリ、グエエ」  
長大なペニスで喉奥を突き上げている馬妖魔が喜びの  
声を上げる。

「そうそう、穴さえあればザーメン出せるしなあっ」

そう言うと、妖魔達はそれぞれ射精を始めた。  
ミカの穴と言う穴に精液が流し込まれる。  
マ〇コ、アナル、双乳、喉、それぞれの場所で思い思いに射精し  
みるみるうちに、ミカの体が精液で膨れ上がる。

「おほ……おぶげっ……ぶぶっ……」

空気の通り道をザーメンが通るたびに  
喘ぎ声のような無様な音が奏でられる

びゅる  
どぶっ

「榛名ミカあ、ザーメン美味いかあ？」

「もう、聞こえてないんじゃ無いのおっ」

「退魔師の末路なんて悲惨だねえ、グロエーション」

回々に嘲る妖魔の声に返す言葉など、  
もはやミカには無い。

ただ、突き込まれるままに揺れ動いているだけだ。  
妖魔達は仕上げとばかりザーメンで  
退魔師榛名ミカを穢し切っていく。

「ギャー」お前、出し過ぎたるおがっ」

「イヤイヤ、足りないですよ。  
どスケへ退魔師ミカお姉ちゃんにはさあ」

好き勝手なことを言いながら、  
最後の「絞りとばかりにザーメンを注ぎ込む」

(ミ、ミカあ…  
「い、いめんなさ…い」)

圭は目の前で自分を助けようとした  
先輩退魔師が無惨に犯し潰されていく姿を  
ただ見るしか無かった。  
だが、そんな圭を妖魔達は解放する。

「おい、テメエは逃がしてやんよ、

様名ミカとの約束(笑)だからなあ


お仲間の所に助け呼びに急いだほうが良いぜえ、

この後、先輩退魔師をまだ雑魚共が犯しちまうと

五体残るかわかんねえからなあ、ギャハハ」

ただその見せしめとしての末路を伝えさすためだけの  
妖魔の悪趣味活悪辣な余興だった





東京中で最強と呼ばれた退魔師様名ミカが消息を絶った。搜索をしていた退魔師たちのもとへ入ったばかりとなった。主が現れ、ミカの居場所を伝える。退魔師たちが救出にその現場に駆け付けたときですら凌辱は終わってはおらず、ミカへ制裁を与えた上級妖魔がその場を去ってなお、精液の海と化したゴミ処理場で未だに数十体の下級妖魔が既に物言わぬ亡骸となり果てたミカを犯している最中だった。

ミカの末路は無惨そのものであり、凌辱に使われた穴でまともなところは一切なく、身体中の内も外も全て精液で溢れかえっていたという。歴戦の退魔師でも目を背けるほどの暴虐の限りが尽くされたことを見て取れた。肉体も魂も、その尊厳すら全てを犯し尽くされたミカの最期は妖魔のブラックリストに載り復讐の標的とされた退魔師の末路として、最後の姿は東京中の退魔師を震撼させることとなる。









































































































































































































